# 非血縁家族における子どもの自分史形成への発達支援
## －育て親によるテリングをめぐる探索的検討－

富田庸子（鎌倉女子大学）　古澤頼雄（中京大学）　塚田-城 みちる（中京大学）　横田和子（NPO 環の会）

<要　旨>

血縁のない子どもを幼い頃から迎え育てている非血縁家族において、育て親が子どもに、生みの親の存在や出自に関わることがらを伝え続けて子どもの理解を形成していく試みを「テリング」と呼ぶ。

本稿では、生後２ヵ月で育て親のもとに迎えられた協力児１名が６歳になるまでのテリングの進捗を育て親へのインタビューから把握し、協力児が自己理解や親子関係理解を深めていくプロセスを解釈的に検討した。その結果、(1)父母からの一方向的なテリングから父母-協力児間の双方向的なテリングへの変化、(2)弟を迎えるという固有の経験を通した理解の深化、(3)周囲との違いに気づき始めることによる模索、(4)生みの親や血縁者に対する思いの複雑な表出、などが見出された。

<キーワード>

**テリング　養子縁組　アイデンティティ　自分史　発達支援**

**【はじめに】**

血縁のない子どもを幼い頃から迎え育てている非血縁家族において、育て親が子どもに、生みの親の存在や出自に関わることがらを伝え続けて子どもの理解を形成していく試みは、「テリング(telling)」と呼ばれている。テリングにおいては、子どもの出自に関することがらは、ある日突然打ち明けるものでも一度告げて終わるものでもなく、日常生活の中で子どもの成長に応じて伝え続けられるものである。

筆者たちは、テリングを前提とした養子縁組を実践しているＮＰＯ「環の会」[1]の協力を得て、育て親たちの子育てやテリングを検討してきた。古澤・富田・鈴木・横田・星野(1997)や富田・古澤（2004)では、テリングを行っている育て親たちが、(1)良好な夫婦関係をもち、子どもを迎えたことによって満足感、幸福感を高めていること、(2)子どもをひとりの人間として尊重し、子育て期を人生で最も幸せな時期として評価していること、(3)「生みの親がいてこそ子どもがいて今の家族がある」という認識が強く、生みの親の存在を受け入れることが子どものありのまま全てを受け入れる大前提だと考えていること、などを見出した。また、富田・古澤・石井・塚田-城（2004）では、育て親たちがテリングにおいて考慮しているポイントとして、(1)生みの親も育て親も共に子どもを大切に思っていることを伝え続ける、(2)テクニックに陥らず、子どもの成長、性格を配慮する、(3)わかりやすく、嘘をつかず、子どもが話したがる時にはきちんと相手をする、といったことが示された。さらに古澤・富田・塚田-城・森（2004）では、育て親たちが、

[1] NPO「環の会」は 1991 年に設立され、2007 年７月１日現在で 137 家族が登録されている。

(1)乳児期のテリングが、子どもの理解を期待するというよりはむしろ育て親にとっての練習、率直な感情表出としての意味をもつこと、(2)３歳頃と就学頃にテリングの節目を感じる育て親が多いこと、(3)思春期以降のデータ蓄積は十分ではないものの、様々な葛藤が生じる可能性が示され、そこでは育て親たちのネットワークが重要なサポート資源となり得ること、が見出された。

こうした研究成果を踏まえ、本研究では、遺伝的つながりのない親子関係において育つ子どもが、幼少期からのテリングを通じて「生みの親がいることで自分がいて、今の家族がある」という存在のつながりを理解し、自分史の根幹を獲得していくプロセスに焦点をあてる。子どもの自分史形成にとってテリングがどのような意味を持つのかについては、従来の発達心理学研究の知見をふまえて、次のように考えることができる（古澤・富田・塚田-城、2006）。

１．子どもが幼い時から始まる親子の経験の共有によるエピソード記憶から一般化された表象へという流れは子どもにとっては何よりも語り手としての育て親の表象を確立する過程であると判断できる。このことは、育て親についての表象の性質が生みの親について子どもが抱くイメージにも影響していく可能性を示唆している。

２．子どもが２歳半頃から始まる親子間の対話のあり方は、子どもの過去経験想起の様態に影響する。このことは、子どもの想起を引き出そうとする親のテリングの試みが、子どもの想起を促しながら共同的に構成されるものであればあるほど、その内容が子どもに自己の物語を生んでいく可能性があることを示唆する。

３．育て親によるテリングが子どもの自分史形成にとって本格的な意味をもっていくのは、４歳以後と考えることができる。その根拠となるのは、子どもが内言を獲得していくこと、時間の経過を理解できるようになること、自分だけでなく、他者にもメタ認知が存在していることを理解するようになることなどである。

４．子どもは学童期から青年期にかけて自分の出自を知りたいと思うようになるが、そのことは自己同一性の基盤である「対象存在あっての自己存在に気づく」ことを促していく。この気づきは他者からの情報伝達によってなされるのではなく、子ども自身が時間をかけて気づいていく過程であると理解する必要がある。

本研究は、このような理論的背景をもとに、テリングという相互世代的ないとなみを通して、子どもが抱く断片的な自己感が自分史へと統合される過程を詳細に検討しようとするものである。血縁意識が特に強いとされる日本社会の中で、子どもの発達に伴って育て親はどのようにテリングを行っていくのか、子どもはどんな反応をみせ、語られる内容をどのように理解しながら自分史の形成につなげていくのかを検討し、子どもの自分史形成をサポートするシステムの構築につなげていきたい。

## 【方法】

上記の目的を果たすため、筆者たちはさまざまな縦断的調査（古澤他、2004）を実行中である。そこで本稿では、既得のデータの中から、環の会を通じて育て親のもとに迎えられたＡ（男児、６歳０ヶ月[2]）に対するテリングについて、育て親へのインタビューで語られたエピ

[2] Ａと家族の年齢は、2007年７月１日現在。

ソードを解釈的に検討し、今後の研究展開につなげることを目指す。

**1．Aの家族状況ならびにテリングに関する父母の基本的態度**

父（39 歳）、母（39 歳）、B（弟、3歳 11 か月）、C（妹、2歳1か月）との5人家族。父母には妊娠出産の可能性がなく、A[0:2][3]を環の会を通じて迎えた。A[2:4]の時にB[0:3]が、A[4:6]の時にC[0:8]が迎えられた。

父母は、Aを迎えたその日からテリングを始め、日常共に過ごす時間の多い母がテリングの主な担い手となって、入浴中や就寝前など、日々の暮らしの中で機会あるごとに語ってきた。生みの母親のことは「お腹のママ」と表現したり、「Dママ」と実名で呼んでいる。

父母はAの生みの母親に会ったことはないが、2，3ヵ月ごとに、子どもや家族の写真と手紙を、環の会を通じて送っている。

**2．インタビューの手続き**

2005 年 10 月（A[4:4]）から2～3カ月に1度のペースで、筆者1名が家庭訪問して実施した。初回は家族状況やこれまでのテリングの進捗を詳しく聞き取り、その後は、前回の訪問からの間に生起したテリングに関わるエピソードを尋ねて、Aの様子や父母の思いなどを自由に語ってもらった。父は仕事で不在のことが多く、母へのインタビューが主となった。母は詳細な育児日記をつけており、それをもとにエピソードを想起して語った。筆者は、インタビュー中にメモを取ると同時にボイスレコーダーに録音した。

[3] 本稿では、語られたエピソード当時の年齢を[年：月]の書式で表す。すなわち[0:2]は、当時生後2ヵ月であったことを意味する。

**【結果と考察】**

以下、インタビューで語られたエピソードを分類・整理しながら、解釈的に検討していく[4]。

**1．迎えた時の思いと、テリングのはじまり**

（1）初めて会った時の気持ち

**①「あまりに小さくて、もうドキドキして、でも会った瞬間に... 母親になっていました。なんかものすごく嬉しかったし、それに、責任の重さも感じました。しっかり育てなきゃって気持ちが、最初はすごく強かったと思います」**

（2）生みの親に対する気持ち

**①「お母さんは、産まない選択もできたはずなのに、産んでくれた、守ってくれたって…。ほんとにもう感謝です。感謝しかない…」**

（3）初めてのテリング

**①「『はじめまして』から始まって、『会えて嬉しいよ、会いたかったよ、お腹のママが産んでくれたんだね、生まれてきてよかったって思えるように、一緒に生きていこうね』って…。そんな話をずっとしていたような気がします」**

**②「Aは、（父母が初めてテリングしている間）ずっと寝てたんです。Aも私たちも、なんだかすごく穏やかだったなぁ…」**

父母は乳児院でAと初めて出会った瞬間から親になったことを強く自覚し、自然な感情の発露としてのテリングを始めている。その根底には、産めないことを受け容れ、育てることを主体的に選び取った経緯と、ようやく子どもに出会えた喜び、命をもたらしてくれた生みの母

[4] エピソードの使用については、環の会ならびにAの父母の了解を得ている。また倫理的配慮による修正を加えた上で、紙面の都合と読みやすさを考慮して適宜まとめ、「　」でくくった太字で記載している。

親への深い感謝が感じられる。そして、Aとの出会いは、穏やかで温かな思い出として大切にされている。

乳児院で2泊3日の研修を受けてから自宅に帰った後は、父母は**「もうめちゃくちゃかわいくて、抱っこしたくって、ほとんど**（下に）**下ろさない、寝入った時しか下ろさないで一日中抱いていたって感じで」**育てながら、**「ほとんど毎日**（初めて会った時と）**同じようなことを話していましたね」**と振り返っている。

2．テリングの進捗

（1）拒否反応の現れ

父母はテリングを毎日のように行っていたが、この時期のテリングは、母自身が**「練習のつもりっていうか、私が言いたいから言うっていうか…」**と述べているように、Aの理解を期待するものではなく、実際、Aの反応も特には感じられなかった。しかし、A[0:11]頃から反応が見られるようになる。それは、テリングに対する拒否反応であった。

①「（それまでのように）**話すと、泣くようになったんですよ。あと、夜鳴きをしたり、ぐずったり…。嫌がるっていうか、聞きたくないみたいな、もういいの！みたいな…。ことばはまだ全然話せないんですけど、なんかこう、首を振ってみたりとか、機嫌が悪くなるとか、そういう素振りをみせる時期があったんですよ」**

こうしたAの反応に対して、父母は、**「何か感じているんじゃないか、今は聞きたくないっていうことがあるんじゃないか」**と話し合い、「（生みの母親に）**写真を送る時に、『これ見せてあげたいね、きっと喜ぶよ』なんて話すくらいにして、お腹のママがいるとかってことばは、とりあえず少し控えるように」**配慮した。

テリングを嫌がる時期の存在については、他の育て親たちのインタビューにおいても語られる傾向があり、その原因の検討が必要である。考えられる可能性としては、(1)親の語りのリズムや表情が、通常の親の語りと異なる、(2)子どもの理解を期待せずに語られることで、語りの質が一方的で閉ざされたものとなっている、(3)何度も繰り返し同じような内容を話されることに抵抗を感じている、といったことが予想される。いずれにしても、子どもは、前言語期であっても、話している親の態度を参照したり、語りのリズムなどをとらえながら、テリングに反応していると思われる。

（2）転機：Bを迎える

Aへのテリングを控える時期がしばらく続いたが、A[2:0]の時、父母が第2子を迎える可能性が生じたことが、転機をもたらした。

①「（環の会から）**二人目は？って話がきて、それで、Aに、『赤ちゃんが来るかもしれないよ』って話をし始めたら、なんか吹っ切れたみたいなんですよ。それからはずっと『赤ちゃん来るかもねー』って話していて、それでまた少しずつ話せるようになって…」**

②「（A[2:4]）（Aを迎えた乳児院へBを迎えに行って）**Bを産んでくれたお母さんに会って、それにお母さんがAにすごく気を遣って下さって、『お兄ちゃん、お願いしますね』とかって言って下さって…。その時に、お腹のお母さんっていう人がいるんだっていう感覚がつかめたっていうか、心の中で理解できたのかなっていう感じがしました」**

③「(乳児院で)『Ａもこの部屋覚えてるかな、Ａのこともこうやって迎えに来たんだよ、パパとママと２人で来たんだよ、ずっと会いたくて、そしたらＡが来てくれて、すごく嬉しかったよ』『ＢもパパとママとＡをずっと待っててくれて、今日こうやって会えて、すごいね、４人家族になれたよ』って話しました。『Ｂを産んでくれたママにも会えてよかったね、お腹のママがいたからこうやって家族になれたんだね、Ａにも産んでくれたママがいるんだよ』…」

さらにＡ[2:9]の時、Ｂの特別養子縁組の審判にあたり家庭裁判所が生みの母親の同意確認を行った際、Ａは、母とＢと共に、Ｂの生みの母親と再会する。

④「帰りにちょっとだけお茶して、『Ｂを産んでくれたママだよ、お腹のお母さんだよ』『Ｂを産んでくれたからこうやって一緒にいられるね』って…。で、(３人で)帰りながら、『会えてよかったね、Ｂを産んでくれて、ママ感謝でいっぱいだよ』って話をしたんです。Ｂを抱っこしてくれた様子とか見て、私の中に、ああ、ほんとにこの人が産んでくれたママなんだ、私もママだけど、やっぱり産んでくれた人もママなんだって、そういう考えがすごく湧いて…。私にも親がいるみたいに、子どもたちにも(生みの)親がいる、お腹のママが幸せじゃなかったら子どもたちも幸せじゃない、みんな家族だって…。産みたかったとは思うけど、この子たちじゃなきゃ嫌だし、この子たちを産みたかったっていう思いもあるんだけど、やっぱり産んでくれたお母さんが…、何だろう、やっぱり家族って言うことばしかないかな…。それで、『ママはＡとＢのママだけど、産んでくれたママもママなんだよ、ＡのこともＢのこともすごく好きで、すごく幸せになって欲しいって思っているんだよ、今日会えてママすっごくそう思ったの！』って、そういう話を帰り道ずっとしてたんですよ。そしたら駅のホームで、Ｂのお母さんが向こう側のホームにいて、Ａがこうやって降りてきて、それで(Ａが)『あっ、Ｂのママー！』って叫んで、『バイバーイ！』なんかしてて、その後にぽろっと言ったんですよ、『Ｂ、よかったねー、Ｂのママはかわいかったねー、会えてよかったねー』って…。『みんなで会えてよかったねー』って言ってくれて、もう私も、わぁーって思って、ぽろぽろって(涙が)…」

⑤「(仕事の都合で同行できなかった父に)夜、『会ったんだよー、かわいかったよー』って(Ａが)また話してて、『よかったねえ、Ａのママもきっとそう思っているからね、いつか会いたいね』って言ったら、『会いたいねえー』って…。深くは考えてないかもしれないんですけど、まだ２歳だったんで計り知れないんですけど、でもそうやってやっぱり、お腹のママがいるってことをほんとに受けいれられたと思うんですよ。それからは(Ａや家族を撮った)写真を見て、変な顔してると『送ってあげようよ！』『えっ、こんな顔の送るのー？』みたいな、笑いながらそんな風に言ってくれるようになりましたね。ぐずることも全くなくなったし、テリングの後に夜鳴きするとかいうのもなくなりましたね…」

Ｂを迎えるプロセスを父母と共に体験し、Ｂの生みの母親にも会ったということが、Ａに変化をもたらした。Ａにとっては、これまで父母

からある意味では一方向的に与えられていた自分自身の出自に関わることがらを、まさに具現化する体験だったのではないだろうか。そしてAにこのような変化が生じたということは、Bを迎えるずっと以前から、Aがテリングを自分なりに受けとめ、泣いたり不機嫌になったりといった形で不安定な情緒を表出しながらも、語られる内容を心の中に位置づけようとしていたことを示している。また、Bの生みの母親がAを優しく気遣ってくれたことによって、記憶にない自身の生みの母親像に対する不安が解消され、安心感が得られたのかもしれない。

Bを迎えるという絶好の機会がAの自己理解を促し、テリングがAと父母との双方向的なものとなった。また母も、Bの生みの母親に会ったことによって、「産みの母親」という存在の自分たちにとっての意味を、産めなかった自分たちとの対比からくる葛藤も含めて、改めて深く感じ取っている。Grotevant, McRoy, Elde, & Fravel(1994)は、Open Adoption[5]においては育て親の産みの親に対する共感が増すこと、子どもが養子であることを理解するのが容易になることを報告しているが、Aの家族においても同様の結果が示された。

（3）テリングにおける気負いの消失

その後、父母は、日常の様々な機会を捉えて**「自然にテリングしてきた」**と述べている。**「最初はすごい気負っていたんですよ。迎えた当初は、言わなきゃっていう気持ちがすごくあったんですけど、そういう**（嫌がる）**時期があって、無理してもだめだ、本人の様子を見ながらにしようって…。それからBを迎えたら**（テリングが）**すごく進んで、もう全然、Aにはもう完全に自然に、『言い過ぎだ』って**（母の）**妹たちに・られるくらい…」**と、母自身、テリングの気負いがすっかり抜けたと感じていた。この頃のテリングは次のような内容で行われている。

**①「例えば、歯医者さんで『虫歯がない』って言われたら、『すごいね、虫歯がないのはママが頑張って産んでくれたからだよ』とか、ウンチをトイレで出来るようになったら『ママ手紙に書けちゃうよ、ママもパパも嬉しくて泣いちゃうけどDママも泣いちゃうよ』とか…」**

**②「近所の方がおめでたで、お腹が大きくなるのを毎日見られるんですよ。それで、『こんなに大きくなってすごいでしょ、Aのママも一生懸命お腹の中で育ててくれたんだよ、大きくなあれって言ってくれてたんだよ』って…。まだ3歳くらいだと、お腹のママっていっても結局よくわからない、生まれるとか産むとかってこと自体たぶんわからないんで、そんな時にちょうどいいタイミングで、赤ちゃんはお腹の中にいるんだって…。それに、大事にしてるってよくわかるじゃないですか、だから、『ああやって大事にしてくれてたんだね、よかったね』って…。**（そういう時の）**Aは『へへっ、そうだったんだあ～』って感じで、照れていますね」**

このようにテリングを積み重ねていった父母は、A[4:6]の時、環の会から第3子を迎える意思があるかと尋ねられた。迎えて育てたいという思いと周囲の反対との間で悩む母に対して、Aは、**「『赤ちゃんはAが守るから大丈夫だよ』って」**励ましたという。実際、Cを迎え

---

5 育て親と生みの親との間に何らかのコミュニケーションがある養子縁組形態（Chapman,at.al.,1987）

て家族５人の生活を送る中で、父母は、ＡがＣにみせる配慮に感じ入っている。

③「（Ａ[5:1]）**ＡがＣに時々そっと『産んでくれてよかったね』『Ａが守ってあげるからね』なんて言ってるんですよ。**（母に）**見られてるって気づかずに…」**

④「（Ａ[5:5]）**小児科でＣが『○○さん』って**（特別養子縁組成立前のため、Ａたちと異なる姓で）**呼ばれた時、『なんでだよ！□□**（Ａたちの姓）**なのに！』って怒ったんです」**

⑤「（Ａ[5:8]）（Ｃの縁組が成立して入籍したことを）**Ａが一番喜んで、『□□になったんだよね！』って叫んでました。Ｃに何度も『□□になったんだよね！』『よかったねー！』って言って、その夜はお店に食べにいったんですけどその時も『嬉しいね！』って叫んでいて…。『Ａもそうだったんだよ』って言ったら、『そうか！嬉しいね！』って…。それからしばらくは、『Ａは～さん、Ｂは・・さんだった』って、お腹のママの話が続いていました」**

ＡがＣにテリングをするという現象は、父母の模倣とも捉えられるが、たいへんに興味深い。また、ＡがＣに対して発する「守る」ということばは、父母がテリングにおいて「生みの母親が命を守ってくれた」と語っていることにつながっているのかもしれない。Ｃの命を託された家族の一員としての自負心が、Ａの中で芽生えているのではないだろうか。このように、テリングを通じて、Ａの自己理解や親子関係理解が少しずつ深まっていると感じられる。

（４）不十分な理解状態の判明

一方で、Ａの言語発達が進み、考えをことばで表現できるようになるにつれて、その理解状態が浮かび上がってくることがある。

①「（Ａ[4:5]）**買い物に行った時、急にＡが大声で『みんなママは二人しかいないからなあー』って言ったんですよ。えっ、何言ってるの？って感じで、『違うよ、みんなじゃないでしょ、環の会のお友達はそうだけど、みんなじゃないんだよ』って…。」**

Ａは、誰にでも産んでくれた母親がいること、そして、自分には「二人のママがいる」ことは理解出来ていたが、それが他者と異なることだとは理解していなかった。「二人のママがいる」という状況が身近なＢやＣにも共通しており、また、こうした話題は家族や環の会の集まり以外では話される機会があまりないため、誰にでも「二人のママがいる」と無条件に信じていたのだろう。これは幼児期の思考の特徴である自己中心性の現れともいえるが、発達理論的にも他者のメタ認知を理解できるようになっていく時期に現れたこうしたエピソードは、**「これからは、大事とか大好きとかっていう、私たちの中の話だけじゃなくて、少しずつ、周りとちょっと違うことだって話もしていかなくちゃいけないのかな、目線を外に広げていかなくちゃいけないのかな」**と父母が述べたように、テリングの内容を拡げ、他者との対比の中で自己理解・親子関係理解を深めていく段階に入ったことを感じさせる。

また、Ａが生みの父親の存在を想定していなかったことも語られている。

②「（Ａ[5:2]）**『パパも二人いるんだよ』って話したら『えっ？何？』って…。パパが二人**

**ってこと、考えてもいなかったみたいで…」**

環の会の幼児期の子どもが「ママが二人、パパは一人」と認知している傾向は、他の育て親へのインタビューでも語られている。育て親が得ることの出来る生みの父親についての情報は、生みの母親の情報に比べて圧倒的に少なく、事情も様々なため、生みの父親についてどのようにテリングしていくのか、迷いや不安を感じている育て親は多い。Aの父母も生みの父親については**「今はまだ、もうちょっと**（このままで）**いいかな…」**と、積極的にはテリングしていないのが現状である。

（5）Aの態度の複雑化

①「（A[5:0]）**Aはやっぱりみんなにお腹のお母さんが別にいると思っているのか、『みんないるしねぇー』って言い方をぽろっとするんです。でもナイーブなところがあるから…、他の人と同じっていうほうが本人が安心なのかもしれないし…」**

②「（A[5:0]）**Aが『**（育ての）**ママから生まれた』って言うので、主人が『違うでしょ』って言ったら、笑っていたんですよ」**

Aのこうした言動について、父母は、他者との違いに気づきつつあるAが、あえて自分を他者と同じに位置づけたい思いの表れかもしれないと捉えている。そして、Aへのテリングが**「赤ちゃんの頃のようにはいかなくなってきた」**と感じ、**「これから…、彼次第ですけどね、どういうふうに理解して、どう疑問を持って、どう悩んでっていうのが出てくると思うんですけど、その時その時いいと思う方法でやっていくしかない…」**と考えている。

（6）生みの母親に「会いたい」

Aは、Bの生みの母親に会った日に、父母の問いに答える形で生みの母親に「会いたい」と発言し、その後しばらくは、**「『会いたい？』って聞けば『会いたい』っていうけど、自分から言ってくるっていうのは、今はまだないですね」**という状況だった。しかし4歳を過ぎた頃から、生みの母親について自ら尋ねてくるなど、変化が現れてきた。

①「（A[4:5]）**『Dママはどこにいるの？』って突然…。『今はまだ遠いところにいるんだよ、いつか会えるといいね』って答えたら、『うん』って…」**

②「（A[4:5]）**Aを叱った時、『Dママがママになるからいいよ！』って…。むかつく～！。逃げに使われたって感じで…。でも、そういうこともいえるだけの親子関係が出来ている証拠だって思っていますけど…」**

③「（A[4:11]）**最近は、『会ってみたい？』って聞いても、前みたいに『会いたい』って言わない。BやCのママには会ってみたいって言うけど…、何か不安が出てきたのかなって思います」**

④「（A[5:6]）**『Dママは死んじゃったの？』って聞くので、『生きてるよ』って答えたら、『会いたいな』って…。『会いたいって気持ちは伝えてみようね、手紙を書く時に一緒に書いてみようね』って答えました」**

⑤「（A[5:7]）**『Eママは自分のママだ』ってAとBが喧嘩したんですよ。『EママはBのママでしょ、AはDママでしょ』って言ってきかせたんですけど…」**

⑥「（A[5:10]）（母子4人で一緒に寝ている

時）**Aが眠れないみたいな感じで、『Dママはどこにいるんだろうね』って。『会ってみたいの？』って聞くと『会ってみたいな』って…。でも、不安もあるみたいで、聞いてはくるけど深い話になるのを避けるような感じなんです。『（環の会職員の）○○さんに相談する？』って聞くと、『いや、いいよ』って…」**

Aは、Bの生みの母親に会ったことをきっかけに生みの母親がいるのだということは理解出来たが、5歳頃から改めてその実像を求め始めたのではないかと思われる。どこかにいるのならばなぜ会えないのか、いったいどんな人なのか、Bの生みの母親のイメージはあっても自身の生みの母親のイメージがつかみきれないAの揺らぎが感じられる。父母はそんなAの揺らぎを受けとめながら、**「写真もないし、会ったこともないし…、やっぱり何か形が欲しいのかな」**と考えている。

また、Aは生みの父親や血縁のある兄弟の存在についても尋ねてくるようになった。

⑦「（A[5:8]）**『お腹のパパ、いるの？』って聞いてきたので、『もちろんいるよ』って答えました。「なかなか会えないと思うけど会いたい？』って聞いたら『別に』って…」**

⑧「（A[6:0]）**急にAが『オレひとり？』『兄弟もいるの？』って…。**（Aには血縁のある兄がいるが、その存在を話したことがなかったので）**どう答えようか迷ったけど、『お兄さんがいる』って言ったら『**（環の会の集まりでよく遊ぶ）**○○くんがお兄さんだ！』ってびっくりすること言って。『違うよ、○○くんじゃないよ、でもいるじゃん、BとCがAの兄妹じゃん』って言ったんですけど、『ふーん』って…」**

このように、Aが、自分の存在に関わる他者の存在についての認識を少しずつ拡げようとしていることが感じられる。父母は、生みの父親や兄についての情報はほとんど得られないことがわかっており、また、どのように話していくのかを決めかねている。しかし、生みの母親については、**「写真とか、会うとかってことがあると、Aにも、テリングする私たちにも、何か形ができるような気がする』**と感じており、**「小学校になると'誕生'って授業もあるし、出来れば入学するまでに会わせてあげられたらって思う。A[6]の名前の由来も聞いてないし、**（生みの母親の）**思いをもっと伝えてあげたい。会っていないからイメージが膨らんじゃって葛藤がたいへんなんじゃないかと…。まだ早いのかもしれないけど、その時その時で、葛藤をクリアしてあげたい、葛藤にあった回答をしていきたいんです」**と述べている。

環の会では、育て親家族と生みの親側との交流はすべて会を通して行われ、双方のニーズが一致して初めて「会う」ことが可能になる。Aの生みの母親と環の会とのつながりは持続されているが、会える見通しは今のところ立ってはいない。

今後のAに対するテリングの進捗では、生みの母親に会うのか（会えるのか）どうかが、大きな影響を与えると予想される。

## 【おわりに】

以上のように、父母へのインタビューで語られたエピソードを通じて、Aがテリングに

---

6 環の会では、多くの場合、生みの母親が子どもの名前をつけている。

よって自己理解や親子関係理解を深めていくプロセスを解釈的に検討してきた。このプロセスは、個々の子どもに固有のエピソードで構成されていくものではあるが、個別性を超えた心理発達プロセスとして共通に理解できる点も多い。今後さらに多くの実証的・縦断的なケース研究を積み重ね、子どもがテリングを通じて自己を生み出し、自分史を形成していくプロセスを詳細に検討していきたい。

また、父母へのインタビューでは、Aの幼稚園の教職員や保護者といった周囲の人たちに対して、自分たち親子の成り立ちをどのように話していくのか、その難しさが頻繁に語られた。紙面の都合で本稿の分析には含められなかったが、**「第三者へのテリングのほうがむしろ難しい…」**という父母の切実な思いを耳にして、社会の中で他者と関わり、他者との対比によって自己を際立たせていくというアイデンティティ形成上の必然性において、Aたちの「生きにくさ」を感じた。今後さらに研究を進めて、遺伝的つながりをもたない親子関係において育つ子どもの自分史形成に必要とされる発達支援システムの構築にぜひともつなげていきたい。

## 【文献】


Chapman,C.,Dorner,R.,Silber,K.,and Winterberg,T. 1987 Meeting the needs of the adoption triangle though open adoption:The adoptive parent. *Child and Adolescent Social Work*, 4, 3-12.

Grotevant,H.,McRoy,R.,Elde,C.and Fravel,D. 1994 Adoptive family system dynamics: Variations by level of openness in the adoption. *Family Process*, 33, 125-146.

古澤頼雄・富田庸子・鈴木乙史・横田和子・星野寛美 1997 養子・養親・生みの親関係に関する基礎的研究－開放的養子縁組（Open Adoption）によって子どもを迎えた父母－ 安田生命社会事業団研究助成論文集、第 33 号、134-143.

富田庸子・古澤頼雄 2004 Open Adoption 家族における育て親の態度－子ども・子育て観と夫婦関係－ 中京大学心理学研究科・心理学部紀要、第３巻第２号、37-51.

富田庸子・古澤頼雄・石井富美子・塚田-城みちる 2004 育ての親が生みの親の存在を子どもに伝え続けること－その二 育ての親によるテリング－ 日本発達心理学会第 15 回大会発表論文集、115.

古澤頼雄・富田庸子・塚田-城みちる・森和子 2004 育て親が生みの親の存在を子どもへ伝え続けること－Open Adoption におけるテリングをめぐる発達支援－ 財団法人明治安田こころの健康財団研究助成論文集、第 40 号、132-141.

古澤頼雄・富田庸子・塚田-城みちる 2006 非血縁家族において子どもが作る自分史への発達支援－育て親によるテリングに関する探索的検討－ 中京大学心理学研究科・心理学部紀要、第５巻第２号、23-33.


## 【謝辞】


本研究にご協力いただいたＡくんご家族をはじめ環の会のみなさまに、心から御礼申し上げます。また、明治安田こころの健康財団より研究費を助成いただいたことに、深く感謝申し上げます。